

## 第18回新生匠瑳戦略会議 会議録（概要版）

開催日時：平成24年7月30日（月）

午後7時00分～9時10分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第3委員会室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）萱森孝雄、越川八代枝、鈴木和彦、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男

（11人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）安藤建子、宇野充紘、越川竹晴

（一般公募者）八木幸市

（4人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、富井副主査（2人）

### 1 開 会

### 2 あいさつ（渡辺委員長）

（省略）

### 3 議 事

#### （1）里山・檀林問題について

#### （2）市街地活性化について

- ・本日の議題については、これまでのように月1回の会議で解決できる問題ではない。最終報告に向けて具体性を持たせた政策提言を行うために、部会を設置したいと思うがいかがか。
- ・里山で何か特産品みたいなものはできないだろうか。例えば長野県では、かつて松茸がよく採れた。山が荒れてからは採れなくなってしまったが、山を整備し始めたら、また松茸が採れるようになったということである。
- ・環境問題で里山保全という視点はあるが、それだけだと里山再生はうまくいかない。特産品や何らかの価値を生み出さないと、なかなか共感は得られない。
- ・お金につながらないと事は進んでいかない。収入につながれば、黙っていても仲間

は集まってくると思う。

- ・里山を整備することで何かに利用できるという目的がないと、ただ里山を整備するだけでは継続が難しい。
- ・川を利用した農村発電など、自然を生かした何らかのエネルギーを生み出せないだろうか。例えば、復興地域ではそういう取り組みを積極的に行っている。
- ・文化として里山や檀林に包み込まれた生活を取り戻すというアプローチをしないと、長続きはしないし、人も変わらない。暖房は必ず薪ストーブを使用するなど、そういう生活を取り戻さない限り、維持していくのは困難だと思う。
- ・福岡県にある「柳川の掘割」では、行政職員が市長の政策に反旗を翻し、頑張ってきた環境を取り戻した。要するに「戦い」だが、里山が「邪魔物」になっていると思っている人に「戦え」とまでは言えない。
- ・邪魔だと思っている里山に、バイオマスやチップなど何か生み出すことはできないだろうか。
- ・バイオマスも資源循環型のエネルギーなので良いと言われているが、それを利用して作った堆肥を農家は嫌がる傾向にある。説得して使ってもらうには、やはり戦うしかない。
- ・「循環」は一つのポイントで、かつては里山や集落、農業と生活が全て循環していた。それをもう一度違うかたちで取り戻せないだろうか。
- ・香取市にある和郷園では、牛や豚、鶏などの糞尿を乾燥させ、そこにレストランで出る残飯を混ぜて肥やしを作っている。その肥やしを使って作った野菜を、またレストランで買ってもらい循環させている。
- ・農業にも企業が参入してくる時代で、和郷園も農協をまったく通さずに流通させている。野菜畑で食べていくためには、農協を通さず自分たちで直接売っていくしかないという考え方である。
- ・農協などの出荷団体を經由せずに市場外へ流通させることは、生産者にとってありがたいことではあるが、それをできる人はほとんどいない。直売所などで売ろうとしても販売量より生産量の方が超えてしまうため、生産したものを全て販売できる農協を通さざるをえない。
- ・直売所なら生産者が価格を決められるというのは幻想で、価格形成はできるが価格コントロールができない。結果的に大型流通に任せておく方が安定するわけである。
- ・農業は価格と合理化の問題だけでいくと、匠瑳市域では区画整理が必要になってくる。区画整理をして土地を集約していかないと、機械化や効率化はできない。集落農業を確立していくことになると、循環型の農業などを考えていく必要がある。

- ・ J T跡地については、何かを発想するときには他人ごとになってしまうが、自分も負担させられているという視点では他人ごとにはならない。しかし、里山が荒れていて、果たして誰が困っているのか。
- ・ 中間報告で提案したことと、本日の議事はどういう関係にあるのか。議論がバックしているような気がする。本日の議論で求めているものは、いったいどんなことなのか。
- ・ 伝道師や中間支援組織を作って市民協働でまちづくりを行うのはいいことだが、現在の状況を作り出している構造的な部分を変えていけるような作り方をすべきだと思う。市民協働で行ったときには人が集まるが、そのときだけ人が集まっている状態では、結局元に戻ってしまうと思う。
- ・ 「動いていく中で意識を変えていく」ということはわかるが、いろいろ図を描いた上ではなく、まずは動き出してみた中で自分なりに構造を理解してみてもどうか。動きの中から考えてみるのがスタートだと思う。
- ・ 生産者の意識や生産方法を変えるなど、課題を解決していくためには、生産現場まで効果を与えるようなまちづくりのしくみを作らなければならないと思う。
- ・ 環境問題が危機的状況にあると信じて取り組みを行おうということは、一種のイデオロギーではないか。イデオロギーを前提とする構造化に対しては、否定的な見解もあると思う。
- ・ 東日本大震災を経て、当たり前だった電気のある生活が、計画停電などで生活が混乱に陥った。これは、高度経済成長期を通じてやってきた国土開発そのもののあり方が問われている。自然を大事にするという問題だけではなく、開発行政や国土形成のあり方をもう一度作り直さなければならない。人が自然の中で社会を作っている以上、自然との関わり方は重要だと思う。
- ・ 職場で高齢者や障害者の対応をしていると、まだまだ動ける要支援という人が行き場に困って、何となくデイサービスに来ている現状がある。これを続けていくと最終的には寝たきりになってしまう。制度や交通手段の問題で難しいが、そういう人たちに農作業をしてもらったり、外に出て動いてもらうことで、元気になれる人が多く存在するのではないかと思う。
- ・ 具体化し、動きも作っていく中で提言につなげていくという、この最終報告の方向性についてはいかがか。
- ・ 戦略会議は、中間報告をきっかけに行動する会議へと変貌を遂げ、行動する会議という性格づけで、これまで出てきた意見を実際にやってみるのはどうか。
- ・ 行動するという意識を市民全体に広げていかなければならないわけだが、しくみと

としては市民提案事業など、いろいろメニューはある。提案事業のあり方を提案し、市民から提案を受けて1年～3年ぐらいのスパンで良いものを探してみるという方法もある。

- ・市民提案事業などを利用し、行政と市民が一緒になって商店街のマスタープランを作らせることが、戦略会議の到達点だと思っている。
- ・マスタープランは都市計画用語だが、従来の作り方をするとあまり面白みがなくなってしまう。今まで積み上げてきたものを、成功も失敗も含めて生の情報を載せることが、最終報告にはふさわしいと思う。
- ・マスタープランは必要であるという認識は持ち続けるべきだが、現場の商店主が自らマスタープランを作りたいと言い始めるまで、作成は我慢すべきである。そうやって作り始めるものでなければ、マスタープランに魂は入らないと思う。
- ・本日議論した内容で少人数での部会を設置し、議論を進めていきたいと思うので協力をお願いする。

### (3) その他

次回の会議は、8月31日（金）午後7時から行う。